

ジャン・アヌイ作『ひばり』

聖少女の実存と象徴を浮き彫りにした蜷川演出

2007年2月24日 東京新聞 夕刊

まさに虚々実々。虚構と真実の重層構造のなかで、観客はエレベーターに乗ったように浮遊と加重の感覚をこもごも味わう。蜷川幸雄演出によるアヌイ作「ひばり」は、芝居という嘘を塗り固めて聖少女ジャンヌ・ダルクの究極の真実に迫った。

開幕前のざわめきの中、俳優が三々五々、姿を現す。ジャンヌ役の松たか子も、いまだ役になる前の素の表情。俳優たちは私語を交わし、ストレッチなどして思い思いに時間をつぶしている。

そして始まるのが、かのジャンヌ・ダルクの宗教裁判である。時空は一挙に中世フランスへ。祖国を救った聖少女がイギリス側に裁かれ火あぶりの刑に処せられる、その裁判の手続きとして、ジャンヌの物語をジャンヌ自身が演じるという仕掛けだ。

肉親やフランス軍の隊長（塾一久）、王太子シャルル（山崎一）とその側近が次々に登場して彼女を疑い、勝手に判断し、結局は彼女の論理に巻き込まれる。だがその人物たちも本物ではない。なぜならジャンヌと肝胆相照らす荒くれ兵士が、実は市の城門で引き返していたことを、劇の終わりでは知らされるのだから。これは裁判中のロール・プレイング・ゲームなのだ。

とはいえ脇役たちの人物造形は実に輪郭が鮮明で中身が濃い。台詞の言い回しや、余白の仕草で笑いの気泡を沸き立たせ、時代を超えた人情劇を堪能させる。

ジャンヌを裁く人々、イギリスの国益を代表するウォーリック伯爵（橋本さとし）や、心優しい司祭コーション（益岡徹）、セクシーな悪魔のイメージに

ジャン・ヌヌイ作『ひばり』

聖少女の実存と象徴を浮き彫りにした蜷川演出

2007年2月24日 東京新聞 夕刊

憑かれた検事（磯部勉）、人間そのものを糾弾する異端審問官（壤晴彦）が、ジャンヌを説得し、策を弄して懐柔するのだが、実際は各人それぞれに背負っている価値観の歪みが顕わになるばかりだ。それは観客にとっても同様で、人物が次第に露呈していく矛盾や懐疑は、結局は観客が自らに向ける刃になる。全幕、客席の照明を明るくしておいたのは、観客もまた裁判に参加して裁き裁かれる者であることを示したのだろう。

始めのラフな素描に、鮮やかな色がつき、生き生きと活人化すると、舞台にずっしりと現実の厚みが出る。かと思うと、不意に軽くなることもあって、その繰り返しが進行に緊張感とメリハリを生む。第二幕冒頭、全員がポーズした静止画の中、仕掛け人のウォーリック伯が一人歩き回って心情を吐露、瞬間、濃密な舞台照明が入って全員が動き出す演出は、全体の構造を鮮明に見せて効果的だ。

即席の芝居をしているはずの人物たちが現実の厚みを得ていく。薄っぺらなシャルルに威厳が加わり、虚構はいつか真実と見まごう迫力を持つ。ジャンヌを演じる松たか子は透き通るような肌を紅潮させ、目からは深い輝きを発し、顔の造作までが変わって見える。幕開けの時とは別人のようで、まさしく変容。見ものである。

だがそれからがドンデン返しだ。司祭の情にほだされたジャンヌは信念を曲げ、生き延びる道を選ぶ。しかし孤独の中で、真にジャンヌになること、そのためにジャンヌとして火刑台で死ぬことを自ら選択するのである。怒号と火炎、蜷川ならではの盛り上

ジャン・アヌイ作『ひばり』

聖少女の実存と象徴を浮き彫りにした蜷川演出

2007年2月24日 東京新聞 夕刊

がりの最中、声が響く「戴冠の場面を演じ忘れた！」

そう、これは芝居の中の芝居だったのだ。その虚構のからくりを逆手にとって、フィナーレは荘厳な戴冠式である。フランス存亡の危機には、ひばりが出現して空高く歌い、人心をまとめて国を救う。ジャンヌ・ダルクはそのひばりだとアヌイは言わせる。こうして嘘とまことの網の目をくぐって、聖少女の実存と象徴を目がけ、劇は一直線に駆け昇った。

繊細な日常性と透徹した懐疑が持ち味のアヌイの戯曲に、蜷川演出は陰影と立体感をつけ、戯曲に欠けていた味をも添えた。

乱舞する台詞が隅々まで聞き取りやすく、解釈にブレがないのがいい。